

ならた

成田 歴史 玉手箱

魅せられた田園歌人 百人一首に

神山魚貫は天明8年（1788）9月9日、埴生郡飯岡村（現在の成田市飯岡）に、農家神山三郎左衛門の長男として生まれました。幼名を周助といい、魚貫・松迺舎を号としました。号を魚貫としたのは、佐原の歌人、伊能魚彦を慕いその上に貫き出ようと望んで名付けたといわれています。

魚貫は14、15歳のころから独学で和歌など古典を学びました。百人一首が教科書で、唯一師と呼ぶ和算家、飯島武雄に文法や言葉の活用を学び、その後20余年間は一人で古書を読み続け、独自の作風を築き上げていきました。処女歌集『苔清水』の序に「百人一首の言葉穏やかで、やわらかい調子が耳について忘れられず、和歌を詠もうと決心した」と書いています。

こうして努力を重ねた魚貫は、百人一首はもとより八代集（古今和歌集など平安前期～鎌倉初期までの8つの勅撰和歌集）をすべて暗唱できるほどまでになり、また歌人として名を知られるようになりました。天保年間になると門人として入門する者が増え、「門生名簿写」によれば、国学者の椿仲輔、伊能頼則、鈴木雅之らをはじめ、170余名にも及んでいます。

魚貫が詠んだ和歌は2万首ともいわれ、主な著作には『苔清水』『詞の道芝』『松迺舎文集』などがあります。80歳を過ぎても矍鑠とし、詠歌に親しんでいました。書道にも熱心でした。生涯、自分の心を自然の中に映して久住に生き続けた魚貫も、明治15年（1882）2月3日、93歳の長寿を全うし、生涯を閉じました。



晩年の神山魚貫（成田山霊光館所蔵）

神山
魚貫



安政元年（1854）魚貫が66歳のときに刊行した『苔清水』。この歌集は、魚貫が飯岡村の領主である田安慶頼とその兄越前福井藩主松平慶永に献上しました。（市立図書館所蔵）



圓護台の飯塚ゆき・とし江さん姉妹が大切に保管していた魚貫とその門人が詠んだ13点の短冊。内4点が魚貫の作品。平成9年成田市に寄贈されました。（市立図書館所蔵）



昭和44年11月に市指定文化財となった『苔清水』の版木。56枚の版木が残っています。（成田山霊光館所蔵）

編集後記

15日号に掲載している「成田歴史玉手箱」。発行のたびにご意見やご質問をいただき、反響の大きさに驚いています。8月15日号は成田鉄道多古線、八街線のお話。「線路の幅が60cmで日本最小」という内容で掲載しました。しかし、昭和3年に多古線は国鉄と同じ線路幅に改修され、桜が満開のころには

上野から三里塚まで直通の臨時列車が運転されていました。従いまして、昭和14年撮影の掲載写真の説明で「三里塚駅から成田に…」とあるのは誤りで、三里塚・八街間を走っていた機関車の写真でした。また、ガソリンカーの写真も八街線のものであったことを補足します。